

アフタヌーン珈琲 time 極上の朝ブレンド

七原ハルコ

国際線C A (当時はスチュワードと呼んでいただろう)は、突如胸を押さえて苦しみだした乗客を見て、内心の動揺を努めて顔に出さずに、冷静な声の調子で言った。

「お客様の中にお医者様はいらっしゃいませんか！」

ビジネススクラスの右翼寄り、通路側の席に座っていた外科医は手を挙げ、立ち上がった。

「はい」

アメリカから日本へ向かう機内。具体的にどんな処置をしたのか僕は知らない。唯一わかっているのは、乗客の初老男性は助かり、そして客室乗務員と外科医が出会ったということだ。二人は恋に落ちて、結婚し、僕は生まれた。

「一生のうち、一度くらい言ってみたい台詞ってあるだろ」

同じ部屋で、同じベッドに寝転がって、違う本を読みながら、僕は恋人の背中をつつと指でなぞった。もう、という声と深紅のビーズクッションが飛んでくる。

「ここは俺に任せて先に行け！ とか、そういう、限られ

たシチュエーションでしか通用しないような」

「あー、あるね」

「物語の主人公みたいな台詞。まあ実際言ってくださいってなったら全力で逃げるけど。こっぴど恥ずかしいし」

僕は職場の先輩のことを話した。新人のとき、仕事でミスをしたことがある。残業覚悟で資料のすべてを直さなければならなくなったとき、いくつかの助言と一緒に、銀縁眼鏡の彼は僕にこう告げた。

「時間がもうないから、せいぜい許すかぎり頑張るんだね。君が任された仕事だし。俺は仕事があるから第二会議室にいるけど」

仕事はできるし、教えるのも上手いが、厳しいので有名な人だった。僕は、ただでさえ罪悪感で死にそうなのに、追い打ちをかけなくてもいいじゃないかと、先輩がさらに苦手になった。しかしこの台詞はどうやら「自分も残るから困ったら呼んでください」という意味だったらしい。終電までに間に合うだろうかと絶望していたら先輩がやってきて、資料を直すのを手伝ってくれたのである。レンズ越しに覗く目はやはり冷淡な印象を与えるものではあったが、あのとき先輩が天使に見えた。

全部片づけたあと、先輩は缶コーヒートを奢ってくれた。そしてとても格好いい台詞を、さりげなく口にした。さりげなく。ここがポイントだ。「自分今すっごいいいこと言いましたよ」という顔をしてはだめなのだ。温かい缶で強ばった指を暖め、常態よりも目を緩め、ついでにネクタイも緩めて、本当にぼそりと、何てこともないようにこぼされた一言は、だからこそ空気を揺すぶり、鼓膜を叩き、血脈に乗って僕の心臓を撃ち抜いた。

早く一人前になろう。この人と一緒に、たくさん仕事をこなそう。「一緒に仕事をしたい」。これは男にとっての評価の最上級なのである。

「ツンデレってやつだねえ」

「ツンデレ。それだ」

私はねえ、と駆け出しのライターである彼女は言っ、しばらく唸ったあとで口を開いた。

『そのまさかだよ』って言いたい」

「ソノマサカダヨ？」

「そう。これって誰かが『まさか!』って驚いてくれるのが前提なの。そうして初めて言える」

ヒーローチックな言葉をたくさん連想していた僕は、ま

ったく面白い発想をするやつだと恋人の頭を撫でた。紙の隙間から、ちょこんと飛び出た耳。耳朶をごく小さなルビのピアスが貫いている。ぴりりと鮮やかな赤。彼女はいつも忙しく世界をきよるきよると見回して、そうして見つける何事かはいつも僕を楽しくさせた。例えば「午後の紅茶 朝のもぎたてピーチ」という商品を見つけて「現代の矛盾だ！」と見せてきたりだとか。

男性アイドルやタレントのゴシップやドラマ。それまでつきあってきた女の子の話題はそれくらいだったので、デートは映画や水族館やショッピングモールがお決まりだった。ともすれば途切れる会話、紛れ込む重さのある沈黙に耐えられそうになくて、空白を埋める何事かを、僕は常に必要としていた。そして恋の終わりはいっただって、はじめから何も起こっていない気がしてならなかった。

同じ空間で、てんでバラバラなことをすること。何も話さないこと。沈黙を愛すること。たまに背中をつついたり、手を握ったりすること。僕は彼女を尊敬して、彼女も僕を大事にしてくれて、おそらくは彼女がちょっとくらい太ったって、しわくちゃのおばあさんになったって、僕は彼女を大切にできるだろうという確信。友人、恋人、相棒。さ

まざまな境界は曖昧になって、その真ん中に彼女は一人座っている。そして僕は彼女を家族にしたいとも思った。

目をのぞき合ったりして、つやめくそれを「飴みたいだ」なんて僕は思う。

「飴玉三秒でがりりってしちやう側の人間のくせに」

「今度から舐めるようにする」

「やめて」

いつも、恋は終わってしまうとはじめから、何一つ起こらなかったような気になった。

最後のひとつを除いてはそうだった。

モードあるいはハイエンド系、と呼ばれるらしい女性ファッション誌を僕は眺める。海外旅行を特集した「ページダイブ」の文字。大量のトマトを投げ合う祭りを伝える写真は車内の明かりではグロテスクな惨状として目に映った。きつと違う。太陽の燦々と降る情熱の国、瑞々しいトマトは生命力に溢れている。血液よりも一層鮮やかな赤。この記事を書いたのは僕のかつての恋人だったひとだ。

昔、ずっと昔、彼女が僕の部屋で同じ雑誌を読んでいた

ことがある。参考になるのかと僕が尋ねると、これってどんな場所を着るのってつっこんだり、どうやって着るのかわかんない服を見るのって面白いよ、と彼女は答えた。僕はその日、初めて彼女の服を脱がせた。青いストライプの、前開きのシャツワンピースは単純なパズルみたいに解けてしまったことを、何となく思い出す。

深夜、道端に車を停め、僕は買ったばかりの缶コーヒーを二つ手に取った。白い手袋を外して、ポケットにつっこんで、タブを開けないまま指を温める。フロントガラス越しに見る、点滅する黄色信号と街頭のオレンジの、どこを見たものかわからず、しかもどこも見たくもない目で、目の焦点は簡単にぶれていく。

近くのマンシヨンの駐車場から出てきた黒いセダンに視線をやったのは、つまりは必然だった。静かな街の、こんな夜に誰かが起きている、ただそれだけの共感が嫌に胸に刺さるときがある。

バタバタバタ、と足音が響き、僕は慌てて後部左側のドアを開けた。途端に身をかがませ、一人の青年が乗り込んでくる。落ち着かない息を整えるより先に、彼は怒鳴った。

「あのセルシオを追ってくれ！ 礼はしない!!」

「お客様の様にお医者様はいらっしゃいませんか」と声を上げたCAの母と、それに「はい」と答えた外科医の父が結婚して生まれたタクシードライバーは——つまり僕のことだが——車を発進させた。

「承知しました！」

黒いセダンはすいすいと、車の少ない深夜の道を進む。僕はそれを追いかける。

「礼はしないって、お客さん御代は」

「追いつけたらちゃんと払う！ 頼む！」

「あの車は何です」

落ち着かない息を整えようと、後部座席の青年が深呼吸するのがわかった。

「刑事ドラマみたいな台詞だから？」

「事件か何かと」

「ほっといたら、事件になるかもしれん。見失うなよ」

実のところ、前の車を追っつけてくれ、というシチュエーション自体はそんなに珍しいものではなかった。団体が二組に分かれてタクシーを使うのはよくあることだ。その場合

でも目的地を伝えるものだが。彼はおそらく、あの車がどこに向かうものか知らないのだ。

国道を南に進んだ。彼は前の座席に手を置いて、とんとんと忙しなく指を動かしている。苛ついていきますと一目でわかる態度だから、僕は彼に話しかけなかった。

信号が黄色に変わり、目標の車は交差点をそのまま直進していった。おい、と焦る青年の声を無視して、僕はブレーキを踏む。交通違反はできない。長距離トラックが三台続けて、目の前を横切っていく。

「……もしものがあつたら」

唸るように青年は言う。あつたら。その後を彼は口にしなかった。必ず追いついてみせますよ、と僕は赤いランプを睨みながら答えた。人の目を奪う赤。警戒を促す毒々しい色。彼を安心させる言葉を吐きながら、内心、自分を疑っている。交差点を通過し、抜け道を行く僕に青年は口を開きかけ、今度は何も言わなかった。

僕はサラリーマンだった。銀縁眼鏡の、言葉は厳しいが優しい先輩を尊敬する、どこにでもいるサラリーマンだった。過去形なのだ、悲しいことだが。

彼の元で何個か大きいプロジェクトを成功させて、だんだん仕事にも慣れたときに、チームの一人が、とんでもない「やらかし」をした。そのミスは、かつて新人だった僕がひいひい言いながら残業でカバーした、あの修羅場なんてさながら牧歌と思われるくらいの重大なもので、口にしなくなるとかなりの損失を会社にもたらした。その社員は、いわゆる縁故採用というやつで、責任を問われはしなかった。そこで犠牲になったのが銀縁眼鏡の彼だった。

「お前、何も言うなよ」

最後の忠告だ、という先輩の命令を、僕は自分の手のひらに爪を立てながら守り通した。しかし最後には僕のデスクは会社の隅の小さな部屋に移された。二つしか机のない、棚と段ボールに囲まれた部屋。それが「追い出し部屋」と呼ばれていることくらいは、僕だって知っていた。

僕よりも先にその資料室3に居着いていたのが、頬のこけた、胸板でスーツを着こなす男だった。眼光鋭くモニタを見つめているので、何をしているのかと思えば戦争のシミュレーションゲームで、遠くの兵士を狙撃している途中で背後から暗殺され、画面がどす黒い赤に染まった。あーあ。けさやかなため息を聞きながら僕は思う。何だコイツ。

僕は窓のない部屋で、ひたすら再び使うことがあるのだろうかと疑わしくなるような古い資料をデータベース化した。三日たって、向かいの席の男は言った。

「お前さん、もしかしてそれが全部済んだら元に戻れるとか思っていないよな？」

「思っていないですよ」と、そう返そうと、言葉はすぐに浮かぶのに、唇の重さは脳からの信号を跳ね返すようだった。

「じゃあ一日の半分で作業をするんだな。期日までに余裕で終わるだろ。片づけたとこで、また何の役にも立たないびつみよーなタスクが割り当てられるだけだぜ」

あとは資格の勉強でもするなり、エントリーシート書いて転職雑誌読むなりさ、しなよ。あんたまだ若いんだ。

アドバイ斯拉しき言葉を、僕は確かに聞いた。しかし意味は脳味噌を素通りしていった。「何の役にも立たないタスク」という言葉が、頭蓋骨の内側をぐちゃぐちゃとかき混ぜて、揺すぶって、こみ上げる酸っぱい何かを僕は何度も飲みくだった。

あるときから向かいの席の男は、持ち込んだパソコンにかじりつくようになった。新しいFPSゲームでも始めたのだろうか僕は思っていた。何をしていたかは、「俺明日

から来ないから」と告げられた、その日に初めて知るようになる。

「は？」

「友人の会社に誘われてな。コネつっーのも体裁悪いし気に食わないしで、何かしら成果を上げると」

「成果」

「新しいシステムを組み上げたから、これだけ持つて。業界というか、業種も違っし、もう会うことはないだろうな」

ほい、と渡されたのは赤いラベルに白いロゴマーク、コーヒー豆の印刷された缶だ。いつか奢ってくれてありがとな、と彼は言葉を添えた。彼はキャスター付きの椅子を引っ張ってきて腰を下ろした。きいという無機物の悲鳴は、二人の部屋で黙殺された。

「アンタの事情は何となく聞いている。仕事にならない仕事こなして、給与は以前と全く同じ。そうだろう？ 激務こなしてる人からすりゃ俺達の環境って天国みたいなんだろうな。けど昇進はない。楽して金だけもらって嬢に貢いだっしてやあないもんな。俺は手応えが欲しい。今以上が欲しい。俺が働くのは嫁さんのためだし」

お前だってそうだと。缶コーヒーのスチールボトルをい

じる指がふと止まった。僕はそのとき初めて、彼の左手の薬指を注視した。数ヶ月向かい合って座りながら、顔を合わせながら、僕は彼をほとんど見ていなかったし、見ようとしてもしなかったのだと、そのとき気づいた。あんさんよ。低い声が耳に届いた。肉食獣を思わせる目が二つ、こちらを向いた。

「飼い殺されるなよ。決して人のオモチャにやなるな」

その言葉は僕の頬を見えない手で張った。目の淡さも年齢も声の調子も随分と違うのに、かつて尊敬する先輩の口にした言葉を僕は思いだした。人に届く言葉というのは、内容だけではなくて、自分が言うべきだという役割を自覚して、その使命感に従容と、真摯に伝えるから響くのだと僕は悟るのだ。

「クーラーの設定温度あんまり下げなくてすまんかったな。すぐ冷えちまって」

「体脂肪率下げるのもほどほどに」

彼は初めて心底おかしそうに笑った。息が勝手に喉を詰まらせた。涙はなかなか目の方まで上っていかなかった。彼は知らないのだろうか、その数日前に僕は、恋人と別れてしまっていた。

左折、右折、しばらくまっすぐ、家電量販店の駐車を通り抜け、左折。あ、と後部座席で青年が声を漏らした。右折レーンで信号を待っている黒いセルシオが目に入って、僕はようやく息をほどこいた。車は海沿いを走っていく。高速度道路の明かりが水面に映るのを目の端で捉えながら、僕は車を追いかけていく。目的地を知らないまま。

埠頭に着いた。

二時間ドラマもかくや、と思いながら僕はハンドルを切る。黒いセダンとすれ違ったとき、旋回できるかと焦る僕に向かって、青年は、いいよ運転手さん、と止めた。

「ここでいい。ここで降ろしてくれ。帰り困るから待っててくれよ」

僕は後部ドアのレバーを引いた。彼は開くが早いか走っていった。どんな成金に乗っていたものかと思えば、先に見える人影は女性で、ほっそりとしたその人を青年は抱きとめ、ずるずるとしゃがみこんだ。窓を開けても風のせいでは声が聞こえない。青年が女性を襲っているわけではなさそう。警察に通報はいらないだろうと安堵する。必死に抱きとめる彼と、彼の背に縋りつく女性は、どこかドラマ

のワンシーンでも眺めているような錯覚を僕に起こさせた。

恋人と二人でテレビを観ていて、そのときは確か、結婚や子育てについての特集がしていたのだ。

「タイムリミットってあるよな」

そう僕はつぶやいた。会話は途切れた。焦りもしない。いつものことだった。沈黙が心地よい関係もあるのだと、そのときの僕は学んでいた。彼女が、あのさ、と口を開く前に、どんな仕事をしたか僕は知らない。唾を飲み込んだり、深く息をしぼったり、あるいは唇を舐めたり、そういうワンクッションがあつたのかどうか。視線はテレビに絡めとられていたから。

あのね、ともう一度。僕が彼女の方を向くと彼女は目いっぱい涙を溜めて笑っていた。

「別れよっか」

僕はどんな顔をしたのだろうか。彼女はごめんね、ごめん、と言いながら涙をこぼす。「追出し部屋」たる資料室3に移動したことは、恋人には伝えなかった。しかし、だからこそ僕の精神は磨耗していたし、公的な部分で満たされないのならせめて、プライベートは理想通りに、と強く

願っていた。父や母のような、分かりやすい社会的勝者にとうとうなれなかった僕は。

「私、子ども産めないんだよね。昔、病氣して」

「そんなの」

「ううん。待って。私の話を聞いてよ。何となくわかるもの、あなたが普通の幸せを欲しがってること。いい大学、いい仕事、いい家庭。そういうの大事だって、私も思うもの。それを知ってるのに、知らんぷりはできないよ。傍にいれば辛くなるもの。それでなくても私、仕事して生きていし」

喉が渴いていた。彼女の涙を拭いてもせずに、僕は何だか自分とはどこか乖離した目で、当事者のはずなのに当然傷つくべきはずなのに、この衝撃的な告白と、ありがちな別れ話を、部分的に白けた頭に溶かしていったのだ。僕が再び口を開くまでに、どれくらい時間が経っただろう。

「……分かった。たぶん俺はきつとずっと君のこと好きなんだらうけど。これからも頑張るってな」

傍にいと辛いから、と言われてしまったらどうしようもない。いや、嘘だ。僕は嘘をついた。本当は縋りつきたいのに、それはみつともない真似だと自分を斜め上から俯

瞰する自分がわかるのだ。

「こんなときも、あなたどつかお為ごかしだ」

物わかりのいい振りした言葉と、ヒーローのお定まりの台詞と、同じ演じるにしてもやっぱり違うよ。

彼女は言った。彼女の静かな失望は2LDKに溜まっていつて、僕も彼女もほとんど窒息していたのだ。

少し離れたところで抱き合う二人を眺める。

ああやって必死になれば。俺はそれでも構わないと心から言えれば。何か変わったのだろうか、そう考える。

すべては過ぎてしまったことだった。しかし、いくら記憶の底の方に沈めても、どれだけ風化してしまっても無駄な、眩ゆすぎる挫折だった。けれど先へ進まなくてはならない。彼女が息を吹き返すのは、例えばスペイン、ぐしやぐしやに潰れたトマトの海。その浅瀬。僕ならばきつと、一二〇円の缶コーヒーで指の冷たさをほぐるとき。

もしかしたら離れずにすんだかもしれない。どちらにせよ別れていたかもしれない。何だっつていい。

僕だって今以上が欲しい。今より少しでもマシになりたい。それは誰かが望むからではなく、言い訳めいた事柄を

積み上げるためではなく、心底、僕自身のためだ。帰りもタクシーで彼らを送る。運転する。そうしなくてはならない。

「乗ったのと同じ場所まで頼みます」

「寝ちやってもいいですからね」

扉のレバーを引きながら答える。午後二十八時の人と午
前四時の人が混ざりあう早朝が何となく好きだった。もう
温くなってしまっていたが、僕は二人にコーヒーの缶を一
つずつ手渡した。

「缶コーヒーを飲むときって絶対に、人は下を向けないん
ですって」

「タクシードライバー」という役割のラインをきっちりと
守りつつ、人生で偶然交差した彼らに向かって僕は、かつ
ての先輩の受け売りを口にした。つややかな、ルビーのよ
うな赤いパッケージの缶。矛盾した商品名を伝える白い文
字。中身を一口呷って、帰りも安全運転頼みますね、と青
年は言った。承知しました、と僕は答えた。バックミラー
越しに後部座席を見る。

二人揃ってあかい目をして、しかし涙は透明だった。

「いい運転手さんだったなあ本当に。それでその女の子っ
てのが」

「まさか」

「そのまさかだよ。お前の母さん」

完

月刊缶じうす学祭号 通巻192号
2013年 10月22日発行
編集人 芹沢一 千歳緑 前崎一成
印刷所 広島大学文団BOX